

# 「マルコ福音書」敷衍の試み (2)

——種まきの譬え（4章1～34節）——

滝澤 武人

本稿の課題と方法については、『桃山学院大学キリスト教論集』第33号（1997年3月）に掲載した拙論にすでに明記している。すなわち、マルコ福音書の編集史的研究を前提としながら、テキストの敷衍を学問的に徹底させていくことである。さらに言うならば、テキストの背後に潜むマルコの内面世界にまで歴史的想像力の翼をはばたかせながら、マルコのメッセージを現代にもう一度よみがえらせようとする試みである。

前号の拙論で試みた敷衍は、マルコ福音書1章1～20節の「序曲」であったが、その部分におけるマルコの編集作業はそれほど顕著なものではなく、したがって私のなした敷衍もまたそれほど徹底したものとなっていない。そこで本稿においては、マルコがかなり意識的で個性的な編集作業をなしている4章1～34節のいわゆる「種まきの譬え」のテキストを選んで敷衍を試みることにしたい。そこにはマルコ特有のきわめて痛烈な「弟子批判」がこめられており、その視点からテキストを解説しなければならないであろう。くわしくは、本稿の〔マルコの編集作業〕の「全体的構成」を参照していただきたい。

なお、拙著『福音書作家マルコの思想』（新教出版社、1995年）は、マルコ福音書に関する編集史的研究であり、それぞれのテキストについてかなり細かい議論をすでになしている。したがって、本稿の〔マルコの編集作業〕

においては、私自身の結論的な判断のみを記すにとどめる。

## 〔テキストの敷衍〕

### 1. 状況設定（1～2節）

イエスがふたたびガリラヤ湖畔で教えはじめた。このガリラヤ湖畔こそがイエスのいつもの教えの場所であった。ユダヤ教の会堂や家などの閉じられた空間ではなく、イエスはいつも開放的な自然の中で民衆に語りかけていたのだ。緑陰の心地よい風に吹かれながらイエスが語りはじめると、すぐに大勢の群衆が集まってくる。押し倒されてしまうほどになると、湖に小船をちょっとこぎだすことになる。船の中に座ったままイエスが語り、押しかけてきた群衆がみな岸辺でその話を聞く、そんな光景がしばしばくりかえされていたのだ。

イエスはいつもいろいろな面白い譬えを用いて民衆に教えていた。だれにでもよく分かるような仕方で話をしていたのだ。イエスが語った譬えの一つに「種まきの譬え」があった。教団の中で伝承されてきた有名な譬えだからだれでもが知っていることだろう。

### 2. 種まきの譬え（3～9節）

「聞くがよい！ ひとりの種まきが種をまきに出ていったとしよう。まかれた種の一粒がたまたま道の上に落ちた。すると鳥たちがやってきてそれを食べてしまった。ほかの一粒の種があまり土のない石地<sup>いしち</sup>に落ちた。土が深くはなかったので、すぐに芽を出すことは出した。だが、太陽が昇るとすぐに焼かれてしまい、土中にしっかりと根づいていなかったのものでそのまま枯れはててしまった。またほかの一粒の種が茨<sup>いばら</sup>の中に落ちた。しばらくすると、そこは茨の茂みにおおわれてしまった。茨が種の成長する力を奪ってしまったので、残念ながら実を結ぶまでにはいたらなかった。たしかにそういう実らぬ種があることも事実であろう。それはあなたがたのよく知っている通りだ。

しかしながら、ほかの大部分の種は良い土地に落ち、元気に芽を出し成長し豊かな実を結んでいる。あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍もの収穫をもたらしているのだ。聞く耳のある者は聞くがよい！」

### 3. 教団の特権意識(10～12節)

さて、この「種まきの譬え」をどのように読むかが問題である。この譬えはもともと「神の国」に関する発言だったのであり、イエスがその譬えを語った真意は、おそらくその時代の「神の国」の理解を批判することにあっただろう。すなわち、ユダヤ教の指導者たちも、あるいは洗礼者ヨハネもまた、終末の「神の国」のおとずれを恐ろしい審判として説いている。いわば民衆を脅迫し、民衆に悔い改めを迫っているだけなのだ。だが、イエスはまったく違う。イエスが説く「神の国」とは、決して恐ろしい裁きなどではなく、むしろ豊かな収穫や恵みにほかならないのだ。なるほどたまたま運悪く実を結ばない種もあるだろう。だがまかれた大部分の種は立派に実を結んでいく。それがイエスの説く「神の国」というものなのだ。

それなのに、現在のエルサレム教団の指導者たちは、そんなイエスの姿勢をまったく理解していないではないか。いやたんに理解していないどころではない。彼らはおよそイエスとはまったく正反対のとんでもない解釈をふりまわしているのだ。

彼らは自分たちのことを「十二弟子と共にイエスの周りにいた者たち」と名づけている。だがイエスが弟子たちだけを特別あつかいするようなことなどまったくなかった。イエスはいつも民衆の中で民衆と共に生きていたからだ。彼らは言っている。「イエスが民衆から離れてひとりだけになった時に、譬えというものについて密かにイエスにたずねたことがあった。」彼らはいつもそうなのだ。いつも閉鎖的で秘密主義であり、いつも自分たちだけの特権をやたらと強調する。だがイエスは決してそんなふうに生きてはいなかったのだ。

彼らは、イエスがこんなことを自分たちだけに語ってくれたと言っている。

「あなたがたには神の国の奥義がすでに授けられている。しかしながら、あの『<sup>そと</sup>外の者たち』にはそれはまったく分からず、ただ謎のような譬えとして語られるだけである。」それはまさしくイザヤ書に書かれている通りである。すなわち、「彼らは見るには見るが認識できず、聞くには聞くが理解できない。したがって彼らが悔い改めて罪を赦されるということなど決してありえない。」すなわち、自分たちの教団組織に属していないあの「<sup>そと</sup>外の者たち」は救われようもないどうしようもない連中なのである。

#### 4. マルコの反論（13節）

彼らはそんなひどいことを語っている。しかもそれを彼らだけに秘かに語られたイエスの言葉としてあちこちで言いふらしている。彼らはいつもそうなのだ。イエスの言葉の力を借りて権威主義的にふるまっている。イエスがはたしてほんとうにそんなことを語ったのだろうか。彼らが自分たちで勝手につくりだした言葉ではないのか。それはイエスの生きざまとはまったく正反対のものだ。

よくよく考えてみるがいい。そもそも「神の国の奥義」などをイエスはまったく語らなかったではないか。イエスがはっきりと言いきっていたのは、「神の国は乞食たち・取税人たち・売春婦たちのものである」ということであつた。神の国は、決して「奥義」などではなく、また弟子たちが自由にできるようなものではないのだ。

彼らにとって、「良い土地」とは自分たちの組織、自分たちの教会のことである。そこに落ちた種だけが三十倍、六十倍、百倍もの実を結ぶのであり、それ以外の場所に落ちた種はすべて滅びにいたる。彼らの「教会」に入ることのみが救いの条件となる。ここには実を結ぶ種と実を結ばぬ種とを選別する差別的な思想が存在している。それではユダヤ教や洗礼者ヨハネとまったく同じではないか。彼らは権威主義的に「聞く耳のある者は聞くがよい！」などと言っている。それもユダヤ教の指導者たちとまったく同じことである。

しかしながら、イエスの「種まきの譬え」は決してそのように解釈される

べきものではないのだ。神の国は決して終末の恐ろしい審判のことなどではなく、農民たちの豊かな収穫や恵みのことにほかならない。イエスならばきっと彼らをこう厳しく批判するにちがいない。「お前たちにはこの譬えがまったく分かっていないではないか。そんなことでは、いったいどうすればほかのすべての譬えをしっかりと理解できるようになるのだろうか？」お前たちはほんとうにどうしようもない連中だ。

## 5. 種まきの譬えの解釈(14～20節)

「種まきの譬え」は、実はお前たちのような人間のことを批判しているのだ。私がそれを教えてやろう。種まく人は福音の言葉をまくのである。それぞれの地に落ちた種は、イエスの福音に接した人間たちのそれぞれの生きざまを象徴している。道の上にまかれた種とはこういう者たちのことである。イエスの福音の言葉を一応は聞いたとしても、すぐにサタンがやって来て、せつかく彼らの中にまかれた言葉を奪いさってしまう。お前たちの中にもイエスからサタンと呼ばれた者がいたはずだ。

石地にまかれた者たちとはこういう者たちのことである。言葉を聞くとただちにそれを喜んで受け入れる。だが、自分自身の生きざまの中にしっかりと根をおろしていないので、その場かぎりのものにすぎない。やがて苦難や迫害に遭遇すると、すぐに躓いてしまう。それはほかでもないお前たちのことを言っているのだ。口ではいつも勇ましいことを言っているくせに、いざという時になると殉教を恐れて生き延びることだけを考えているお前たちのことなのだ。お前たちは、イエスを裏切りイエスに躓いた人間なのだ。

さらにまた、茨の中にまかれる者たちもいる。イエスの福音の言葉を聞くには聞くが、この世の思い煩いや富の誘惑やもろもろの欲望にすっかり目が眩んでしまい、せつかくの言葉を窒息させてしまい、実を結ぶにはいたらないような者たちのことである。これもまたやはり、教団を維持することばかりに追いまくられて、いつの間にかイエスの精神から遠く離れて生きているお前たちのことを言っているのだ。

そして、良い土地にまかれた者たちとは、イエスの言葉をしっかりと聞き、それを自らの生きざまの中に受け入れ、しかも三十倍、六十倍、百倍もの実を結ばせるような人びとのことである。「神の国」とは決して奥義として密かに保たれるようなものではない。今ここに生きている人間のきわめて具体的な可能性のことにほかならないのだ。どのような土地に落ちるかが問題ではない。与えられた現実をどのように生きていくかが問題なのだ。イエスの福音を自らの生きざまの中でしっかりと受けとめ、イエスのように生きていくこと、それこそが「神の国」にほかならないのである。お前たちの考え方は根本的に間違っている。

## 6. ともし火とはかりの譬え (21～25節)

イエスはさらにこんなふうにも彼らに話っていた。「ともし火を持ってくるのは柵の中や寝台の下に置くためだろうか。そんな愚かなことはだれもしないであろう。ともし火というものは燭台の上に置き、部屋全体を明るく照らしだすためにあるのではないか。」

この譬えもまたお前たちのような人間を批判しているのだ。すなわち、せっかくイエスのもたらしてくれた福音を、お前たちは自分たちの組織のためだけに利用している。そんなお前たちの姿勢は、まさにともし火を柵の中や寝台の下に置くようなものではないか。イエスの福音は、世界中のすべての人びとのため、闇の中に生きるすべての人びとを照らしだすためにこそ存在している。イエスの福音はこの世のすべての人間たちの光であり喜びなのだ。

「どんなものでも今隠されているもので現れてこないようなものはなく、またどんなものでも秘密にされていたもので明るみに出てこないようなものはなにもない。」この譬えもまた、お前たちの閉鎖的な秘密主義を批判している。「神の国」とは「奥義」として隠されるようなものであってはならない。どんなにお前たちが自分たちのために隠そうとしていても、やがては顕れてくるようなものなのだ。イエスの福音もまたこの世のすべての人びとを明るく照らしだすようになるにちがいない。

お前たちはいつも「聞く耳のある者は聞くがよい」などと言って民衆を権威主義的に脅している。だが私はその言葉をそのままお前たちに投げ返してやろう。「もしも聞く耳のある者がいるとすれば聞くがよい！」お前たちの方こそもっとしっかりと聞いておくべきなのだ。どうせお前たちには分からないであろうし、聞こうともしないであろうが……。

またイエスはこんなふうにも彼らに語っていた。「お前たちの方こそよく聞いておけ、そしてよく見ておけ！」お前たちはいつも民衆を批判し民衆を裁いている。「彼らは見るには見るが認識できず、聞くには聞くが理解できない……」。だがそれはお前たち自身のことなのだ。お前たちはイエスの福音をまったく理解していない。裁かれるべきはお前たちの方なのだ。お前たちが民衆を裁くその尺度で、お前たち自身がやがて裁かれることになるであろう。いやお前たちにはきっとさらに重い裁きが下されることになるであろう。お前たちがともし火をわざわざ柀の中や寝台の下に置くような愚かなことをしているからだ。

「持っている者にはさらに与えられるが、持っていない者からは持っているものまでも取り上げられることになる。」このイエスの言葉もまたお前たちへの批判なのだ。「持っている者」とは、ほんとうの意味でイエスの福音を聞いて受けいれ実を結ぶ者のことである。そのような人間には三十倍、六十倍、百倍ものものが「さらに与えられる」のである。だがお前たちはまったくそのような生きかたをしてはいない。お前たちは「持っていない者」であり、ともし火を柀の中や寝台の下に置いているような人間なのだ。お前たちがかろうじて持っていると思いこんでいるそのともし火できえも、やがてはお前たちから取り上げられてしまうにちがいない。

## 7. 自ずから成長する種の譬え(26～29節)

イエスは言った。「神の国とはこんなものさ。ある人が畑に種をまく。あとは夜昼のんきに寝たり起きたりしていると、その種が自然に芽を出し、自分でどんどん大きく成長していく。その人がまったく知らないうちに、大地

が自ずから実を結ばせていくのである。初めに茎が伸び、次に穂ができる。そして穂の中にたくさんの実をつけていく……。やがてその実が熟すると、ただちに鎌を入れる。それが収穫というもの、それが神の国というもののなさ。」

「神の国」は、お前たちの「奥義」などによってもたらされるようなものではない。そんな分かりにくいものではないのだ。母なる大地が自然とわれわれにもたらしてくれるもの、農夫ならだれでもがよく知っているあの豊かな収穫のようなもの、いやその収穫こそが神の国というもののなのだ。神の国というものは、ひとりひとりの人間のきわめて現実的な活動の中にこそ存在している。自分自身に与えられている可能性を開花結実させていくことにほかならないのだ。

イエスのもたらした福音もまたそのようなものである。三十倍、六十倍、百倍もの実を結んでいってこそ福音であり、世の中全体を明るく照らしだすからこそ福音と呼ばれるのだ。お前たちのように、せっかくの福音を秘密の奥義にしたり、ともし火を柵の中や寝台の下に置いたりしてはならないのだ。種は種そのもののの中に豊かな生命力を持っており、大地もまた自然とその実を結ばせていく。イエスの福音もまた民衆の中に広くのべ伝えられるべきもののなのだ。

## 8. からし種の譬え (30～32節)

またイエスが言った。「神の国を何と比べようか。どんな譬えで示そうか。そう、それはからし種のようなもの。畑の土にまかれる時には、地上のどんな種よりも小さいが、いったんまかれるとどんどん成長し、どの野菜よりも大きくなって立派な枝をはり、その陰に空の鳥たちが宿れるほどになる。」

たとえどんなに小さなからし種であっても、どんな野菜よりも大きく成長していく。神の国とはそんなもの。どんなに小さな人間の中にも、はかりしれないほどの大きな可能性が眠りひそんでいるもののなのだ。ガリラヤに生きる民衆のひとりひとりもまた、そのような可能性にめざめるべきなのである。



そして、自らのその可能性を現実のものとするところこそが神の国というものであり、イエスの福音というもののなのだ。

## 9. 結び(33～34節)

もう一度言っておこう。イエスは、いつもこのような譬えを多く用いながら自らの言葉を語っていた。それは、どんな人が聞いてもよく分かるようにするためだった。譬えを使わないでは語らなかった。だから民衆はだれでもイエスの話をよく理解することができたのである。

しかしながら、イエスの弟子であると自負している連中は、かえって物分かりが悪かった。当たり前の譬えをやたらに難しく解釈してしまうのだ。そこでイエスは、誰もいなくなった時に、そんなどうしようもない「自分の弟子たち」に対して、すべてを最初から一々説明し直さなければならなかったのだ。イエスが弟子たちだけに秘かに語ったという「神の国の奥義」など、そんなことだったのだ。まったくお粗末な話ではないか。

## 〔マルコの編集作業〕

### 全体的構成

マルコはこの段落をきわめて意識的に構成しており、全体は次のように区分される。

- ① 状況設定(1～2節)
- ② 種まきの譬え(3～9節)
- ③ 教団の特権意識(10～12節)
- ④ マルコの反論(13節)
- ⑤ 種まきの譬えの解釈(14～20節)
- ⑥ ともし火とはかりの譬え(21～25節)
- ⑦ 自ずから成長する種の譬え(26～29節)
- ⑧ からし種の譬え(30～32節)

⑨ 結び（33～34節）

最初の①と最後の⑨とはマルコ自身のつくった編集句であり、全体をその枠構造の中につつまこんでいる。②と⑦と⑧の三つの譬えは、マルコ以前にすでに存在していた「譬え集」の中に存在していたものであろう。それらの譬えは「種」のモチーフで共通しており、⑦と⑧とは「神の国」の譬えとなっている。②もまたもともとはその導入部に「神の国」が明記されていたのかもしれない。

③はおそらく原始エルサレム教団において伝承されてきたものであろう。マルコは、その教団の閉鎖的・権威主義的な「神の国」の理解の仕方に抵抗し論争を挑んでいるのである。教団のエリートたちは「神の国」を「奥義」とし、それを保有している自分たちの組織に属する者のみが救われると考えている。それ以外はすべて滅びゆく「外の者たち」なのである。それは②の種まきの譬えの解釈ともなっており、自分たちの教団のみを「良い土地」と考えているのであろう。

④はマルコにつくり出した編集句であり、教団の姿勢を真っ向から批判するものである。それに続く⑤、⑥、⑦、⑧は、マルコが集めてきてここに並べたものであろう。いずれもここでは③の立場を批判するものとなっている。マルコは、「十二弟子とイエスの周りの者たち」が形成しつつあった教団の閉鎖的な権威主義がどうしても赦せないものであり、その「神の国」理解を認めることができないのである。

マルコはこの段落全体をきわめて痛烈な「弟子批判」となるように構成している。イエスが弟子たちだけに秘かに語ったという記述（10節、34節）は、決して弟子たちの特権を強調するものではなくて、マルコ福音書におけるお馴染みの「弟子批判」の動機にほかならないのである。

## 1. 状況設定（1～2節）

1～2節は、状況設定をつくりだすためのマルコの編集句である。1節は3章（7～）9節に深く関連している。マルコにとっては、「ガリラヤ湖畔」こそがイエスの活動拠点であり、人びとが集う聖なる場所なのである。それは「エルサレム」でもなく、「家」（会堂や教会）の中でもない。

2節の「教えていた」の時制は「未完了過去形」であり、過去における習慣的反復を意味している。イエスはいつもそのようにして民衆を教えていたのである。さらに33節に使用されている「語っていた」という動詞の時制もまた同じ「未完了過去形」となっている。すなわち、マルコはイエスがいつも分かりやすい譬えを用いて民衆を教えていたという事実を強調したいのである。

## 2. 種まきの譬え（3～9節）

この段落全体がマルコ以前の伝承であろう。この譬えが元来どのような意味あいを持つものであったのかを推定することは難しいが、おそらくは終末時の神の国の厳しい審判と悔い改めを強調することに対する抵抗であったと思われる。イエスにとって、神の国はむしろ恵みと祝福の時、すなわち福音の時にほかならないのである。

3節の「聞くがよい」と9節の「聞く耳のある者は聞くがよい」とが枠構造（inclusio）を成しており、エルサレム教団の閉鎖的・権威主義的な姿勢を表わしている。それは12節のイザヤ書6章9－10節の引用によって根拠づけられている。この言葉に対してマルコはかなり執拗にくりかえし意識的に抵抗している（4・24, 7・14, 8・18など）。

3, 5, 7節の「種」はそれぞれ単数形であり、「一粒」の種である。それに対して8節の「種」のみが複数形である。それは滅ぶにいたる者は少なく、恵みの与えられる者たちの方がはるかに多いということを示しているのであろう。また、8節の「芽を出し、成長し、実を結び、～倍にもなっていった」という動詞の時制が「未完了過去形」となっており、すでに完結してい

る出来事としてではなく、未だ継続している出来事として描きだされている。

### 3. 教団の特権意識（10～12節）

おそらくエルサレム教団内部でつくりあげられた伝承であろう。そこには閉鎖的な特権意識がみなぎっている。「十二人と共にイエスの周りにいた者たち」という表現には、イエスの伝統を継承する者という自負心がこめられている。自分たちの教団内部に所属する人間には「神の国の奥義」が与えられ救いが約束されているのだが、「<sup>そと</sup>外の者たち」はその奥義をまったく理解することができない滅びゆく人間たちなのである。

「外の者たち」という表現は一種の差別用語であり、「イエスの周りの者たち」と一対の対照的な表現となっている。3章31－34節において、マルコはその「周り」と「外」とを二度にわたって用いており、その関係をきわめて意識的に逆転させようとしている。「十二人と共に」という表現はマルコが付加したものかもしれない。マルコは「十二人」の有する権威をも批判しようとしているのであろう。

12節の「認識」や「理解」に対して、マルコは素朴な「信仰」を強調している。また「悔い改め」と「(罪の) 赦し」に対しては、その段階にとどまることなく、さらに「福音」の道に進むべきであると主張している（1・15）。「悔い改め」と「(罪の) 赦し」とは洗礼者ヨハネのものにすぎないのである（1・4）。

### 4. マルコの反論（13節）

マルコのつくりだした編集句であり、10～12節における教団の姿勢を真っ正面から痛烈に批判している。これはマルコの「弟子批判」がもっとも典型的に見いだされるテキストである。マルコ福音書の4章と7章には、きわめて明白に意識された構成上の類比が存在している。この4章13節は、7章18節の「お前たちもまた、どうしてそんなに物分かりが悪いのか」という弟子批判の言葉と密接に関連している。

## 5. 種まきの譬えの解釈(14～20節)

イエスの譬えはさまざまな場所でさまざまに解釈されていたことだろう。エルサレム教会の伝統の中では、おそらく「良い地＝エルサレム教会」と解釈されて、エルサレム教会に所属することが救いに通ずると解釈されていたのであろう。だが、この段落の譬えの解釈はそれとはまったく異なったものである。「良い地」に落ちることが目的ではない。ひとりひとりの人間が自らの可能性を開花し結実させていくことこそが重要なのである。

このような解釈は、少なくともエルサレム教会の流れに属してはいない人びとによってつくられたものであろう。おそらく、いわゆる「ヘレニスト・グループ」に属する人びとの中で語り継がれ広まっていたものであろう。そして、それを文章化したのはマルコ自身であったのではないと思われる。

この段落に示されている解釈全体が、10～12節の閉鎖的・権威主義的・差別主義的な思想への痛烈な反論となっている。それは13節のマルコの編集句を受け継ぎつつ、21節以降においてさらにその批判的姿勢を明確化している。この解釈はたんに普遍的真理を展開しているものではなく、おそらくエルサレム教会へのきわめて具体的な批判が含まれていると考えるべきであろう。

15節の「サタン」については、イエス自身がエルサレム教会の指導者であるペテロをはっきりと「サタン」と名指しで糾弾している(8・33)。マルコにおいてペテロはサタンなのである。このことがはっきりと記憶されなければならないであろう。

17節の「福音のゆえに苦難や迫害が生じると、すぐに躓いてしまう者」という表現もまた、おそらくかなり具体的な批判を含むものであろう。「迫害」という言葉は、10章30節と同様にマルコによる挿入であるのかもしれない。なぜならば、この段落には13章と共通する黙示文学的な動機(「サタン」「苦難」「この世」など)が目立つのだが、「迫害」はきわめて具体的で現実的な問題だからである。

弟子たち(特にペテロ)は、みな弾圧や迫害を恐れて「躓いてしまうような者たち」である(14・27～31)。イエスの三度の「受難予告」(8・31、

9・31, 10・33～34) に対して、弟子たちはいずれも無理解のままであり、イエスの逮捕の瞬間に弟子たちは全員逃げ去ってしまう(14・50)。ユダはイエスを裏切り(14・44～45)、ペテロでさえもイエスを三度否認する(14・66～72)。「自分の十字架を担え！」(8・34)とイエスが呼びかけるのも、弟子たちが殉教の死を恐れて逃げまどっていたためであろう(9・1)。

18～19節の表現もまたおそらくは同様であり、現実的な諸問題に汲々としているエルサレム教会という組織の現状を批判しているものと考えられる。特に「富の誘惑」に関するイエス(マルコ)の言葉はきわめて厳しい。だが弟子たちはそれを理解することができない(10・23～27)。誰が一番偉いのかと議論する弟子たち(9・34)や、主導権をめぐって内輪もめをしている弟子たち(10・35～41)の姿もまた、マルコにとっては具体的批判の対象となっていたのであらうと思われる。

この段落の譬えの解釈は、決して一般的・抽象的で深遠な理論として語られたものではなかったのであらう。エルサレム教会の歴史と現状を知る人びとからは、やんやの喝采と共感の爆笑が寄せられるようなものであったのだらう。特に、エルサレム教会の権威主義によって「外の者たち」として差別されていた人びとにとっては、まさに溜飲を下げるようなものであったにちがいない。これにつづく21節以降がさらにそれに追い打ちをかけている。

## 6. ともし火とはかりの譬え(21～25節)

ここには四つのイエスの言葉が集められている(21, 22, 24, 25節)。もともとはそれぞれ個々別々の断片伝承であったものをマルコがここに纏めて編集したものであらう。21節と22節の言葉はすでにマルコ以前に一連のものとして結びつけられていたのかもしれない。23節と24節前半はマルコによって書き加えられたものであらう。

個々のイエスの言葉の意味は別にして、マルコがこの文脈の流れの中にこれらの言葉を置いた意図は明らかである。すなわち、13節以降に展開されてきた厳しい「弟子批判」の継続にほかならない。それぞれのイエスの言葉は

この方向で読まれなければならない。批判の対象は一貫して「十二人と共にイエスの周りにいた者たち」である。彼らは「神の国の奥義」を自分たちの組織が保有していると思い込み、その組織に従わない者たちを「外の者たち」と差別している。その閉鎖主義・権威主義・差別主義こそが批判されなければならないのである。

### 7. 自ずから成長する種の譬え (26～29節)

この譬え全体がそのままイエス自身の言葉であろう。問われるべきは、どうしてマルコがこの言葉をここに置いたのかということだけである。おそらくはそれもやはり「弟子批判」のためにほかならないであろう。神の国は「奥義」などではなく、現実の活動であり収穫である。そして、種は種自体で成長し、大地は自ずから実を結ばせていく。農夫はどうしてそうなるのかを知らない。イエスの福音そのものにもまた、民衆をかぎりなく豊かにする生命力が備わっているのである。決してエルサレム教団が自分たちのためだけに勝手に独占していいものではないのである。

### 8. からし種の譬え (30～32節)

このイエスの言葉をここに置いたのも、やはり神の国を抽象的な「奥義」としてとらえている弟子集団に対する批判のためであろう。そして、「小さなからし種」は名もないガリラヤ民衆を象徴しているのでであろう。マルコはそのガリラヤ民衆の中に大きな可能性を見いだそうとしているのである。

### 9. 結び (33～34節)

この段落は、1節からの譬え集の結びであると同時に、一つの「まとめの句」(要約的報告)である。「語っていた」「語らなかった」「説明していた」のギリシャ語の時制はすべて「未完了過去形」であり、過去における習慣的反復を表している。すでに述べたように、マルコは1～2節と33～34節とを枠構造の中に組み込み、きわめて意識的に相互を関係づけている。すなわち、

イエスは民衆が理解しうるようにいつも分かりやすい譬えをもって語っていたことを強調しているのである。

34節をどのように解釈するかが問題となる。弟子たちに対してだけはやはり特別な教え（奥義）が語られていた，ということをマルコがここで強調しているわけではない。マルコ福音書においては，弟子たちが民衆から離れてイエスと「自分たちだけになった時」や「家の中で」や「密かに」イエスに聞きなおすという状況設定は，まさしく「弟子批判」の典型的なパターンなのである（7・17，9・28，33，10・10，23以下，13・3）。

10節の「イエスが一人になった時」という伝承句に対してマルコは批判的である。そのような閉鎖的な場面で弟子たちにのみ語られたという「神の国の奥義」などをマルコは信用することができないのである。34節もまたやはりこのような「弟子批判」（弟子たちの無理解）として読まなければならない。弟子たちがまったく理解していないからこそ，イエスはもう一度すべてを説明し直さなければならなかったのである。

このことは，4章と7章との間のきわめて密接な構造上の類似からも明らかである。すなわち，7章18節において，弟子たちはイエスによって「物分かりが悪い」と痛烈に批判され，その後に譬えの説明がなされている。そして，そのイエスの説明たるや，食物というものは腹の中に入り（「大便」となって）便所へと出ていくものにすぎないというものである（19節）。すなわち，マルコはこの段落を弟子たちに対するかなり皮肉にみちた批判として構成しているのである。